

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27094

あそびじゅつ「手のひらに入る大切なかたち」
—五感と時間・空間を使って美術体験



開催日： ①平成27年8月24日(月)
②平成28年1月17日(日)
実施機関： 多摩美術大学
(実施場所) (①八王子キャンパス/②美術館)
実施代表者： 海老塚 耕一
(所属・職名) (美術学部・教授)
受講生： ①小学5・6年生 33名、中学生 13名
②小学5・6年生 23名、中学生 3名
関連URL： <http://www.k.tamabi.ac.jp/life/asobi/>

【実施内容】

＜受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点＞

本プログラムは、科研費「視覚障害者を含めたすべての人に開かれた作品の構築」(基盤研究(C)(一般)/25580048)/平成25年度～平成27年度)の研究成果を基に実施した。科研費による研究では、晴眼者のみならず、視覚をはじめ、様々なかたちで心身が不自由な方たちに対する開かれた美術作品の鑑賞のための研究を行っている。本プログラムでは、科研費による研究の知見を踏まえ、見ることを主体としてもものと接するのではなく、触れることにより、ものの在り方とその抵抗の力を探り出し、受講生に五感と時間・空間感覚を土台として感受する作業の面白さを成果として伝えることを目的とした。そこで、受講生に種類が異なる木材を用意し、素材を五感で味わいながら、紙やすりを使って、自分の手に馴染む形に変化させ、その過程で受講生が言語化し、他者と共有し、共に思考することによって発見・気づき、他者との感じ方・捉え方を認識できるような実習を設定した。

受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点は、以下のとおりである。

- ①日常的なものと接点の多くは、視覚によるものとなっているが、ものに手で触れることにより、その表面の肌理、さらには重さ、重心の在り方を感じ、作業を進めるなかでそれらの変容を知り、またものの持つにおいに対しても敏感に反応することにより、視覚以外の感覚でものを捉えた時の、物質の広がりを感じてもらうことに重点をおいた。
- ②プログラム導入時に、研究を行うきっかけとなった研究者の経験を話に交えながら、受講生の「美術作品の鑑賞」に対するイメージについて問いかけを行い、興味を引き付けた。
- ③ワークショップ作業前に、「触れる」ことによる「美術鑑賞」のイメージがわかりやすいように、目を閉じて自身の手を触らせ、その際の感覚の違いによる気づきや、河原の石を用意し、そのさわり心地を感じとったり、石が自分の手元に来るまでに持つストーリーを想像させ、「視覚」という固定概念に縛られない美術鑑賞について、イメージできるようにアプローチした。
- ④ワークショップ材料として杉、楠、バルサの異なる3種類の6cm角の立方体の木材を用意し、見た目、手触り、匂い等の体の五感を使って、素材の特徴を感じとらせ、視覚以外の美術鑑賞方法について伝えた。

- ⑤自分の「大切なかたち」をイメージしやすいように、ワークショップ作業前に完成作品例を受講生たちに手渡し、説明を行った。
- ⑤美術を学んでいる学生や卒業生をアシスタントとして配置し、受講生と「言葉での交感」を通し、受講生自らの発見・体験がより意識化され、表出が促されるように、受講生のサポートを行った。

<当日のスケジュール>

第1回目：平成27年8月24日(月)

- 9:30-10:00 受付(多摩美術大学八王子キャンパス TAU ホール入口)
- 10:00-10:10 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)
- 10:10-10:30 導入のためのお話(講師：海老塚 耕一)
- 10:30-12:00 実習「自分の手のなかにここによく収まる自分だけの形をつくってみよう」(※途中、適宜休憩)
- 12:00-13:00 昼食・休憩(大学)(※キャンパスツアー実施)
- 13:00-14:20 実習の続き(※途中、適宜休憩)
- 14:20-14:30 片づけ
- 14:30-14:50 鑑賞会、まとめのお話(講師：海老塚 耕一)
- 14:50-15:00 修了式(アンケート記入・未来博士号授与)
- 15:00 終了・解散

第2回目：平成28年1月17日(日)

- 10:00-10:30 受付(多摩美術大学美術館多目的室)
- 10:30-10:40 開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)
- 10:40-11:00 導入のためのお話(講師：海老塚 耕一)
- 11:00-12:30 実習「自分の手のなかにここによく収まる自分だけの形をつくってみよう」(※途中、適宜休憩)
- 12:30-13:30 昼食・休憩(美術館)(※展示作品の鑑賞会実施)
- 13:30-14:50 実習の続き(※途中、適宜休憩)
- 14:50-15:00 片づけ
- 15:00-15:20 鑑賞会、まとめのお話(講師：海老塚 耕一)
- 15:20-15:30 修了式(アンケート記入・未来博士号授与)
- 15:30 終了・解散

<当日の様子>



1. 講義：導入のためのお話



2. 講義：素材を五感で感じ取る



3. 実習：紙やすりで木を削り、自分のカタチを探す
（作業風景 1）



4. 実習：紙やすりで木を削り、自分のカタチを探す
（作業風景 2）



5. 実習：木の表面にシッカロールをつけてなじませた後、ワックスを塗ってツヤを出す（作業風景 1）



6. 実習：木の表面にシッカロールをつけてなじませた後、ワックスを塗ってツヤを出す（作業風景 2）



7. 「手のひらに入る大切なカタチ」の完成



8. 完成作品の鑑賞会

＜事務局との協力体制＞

- ・研究支援部が振興会への連絡調整と、提出書類の確認・修正等を行った。
- ・経理部及び研究支援部が委託費の管理と支出報告書の確認を行った。
- ・受講生の受付・実施運営に関しては、本学生涯学習センターと研究支援部が協力して行った。
- ・広報活動は、本学生涯学習センター、企画広報部、美術館が協力して行った。
- ・企画広報部が本事業の当日の写真撮影を行った。

<広報活動>

- ・小中学校、社会教育施設等へチラシの配布や連絡をし、本事業のPRを行った。
- ・生涯学習センター及び企画広報部が多摩美術大学ホームページで広報活動を行い、本事業についてPRを行った。

<安全配慮>

- ・実習の安全確保のため、受講生4人に対し1人の割合で講師及び実施協力者を配置した。
- ・受講生およびサポート学生等に関しては、本学生涯学習センターを通して、学生教育研究災害傷害保険に加入した。(その他の実施者については、大学が加入している保険を適用。)
- ・講座内での怪我等については、講師および実施協力者(こども4名に1名以上配置)が指導し、対応を行った。
- ・怪我・体調不良等の救急時、ならびに、地震・火災時の避難対応については、マニュアルの作成及び訓練等を行い、体制を整えた。
- ・作業から出る木の削りかすを吸い込んだりしないよう、マスク、ゴーグル、掃除機、霧吹き、うがい用の水・コップ等を準備し、こまめに子どもたちに声掛けを行った。

<今後の発展性、課題>

学術の様々な分野で、外界へ新しい方法でアプローチしようと試みる時、その事象について、従来の枠組みや固定概念に囚われず、どのように感受し、認識し、捉えるかということが重要となる。本プログラムでは、芸術の原初的体験を通して、自らが常識的な美術観にとらわれずに多様な方法で感受する楽しさを学び、やわらかな眼差しで世界に接し、感じ、考えることができるよう育む内容を計画した。立方体の木材を自分の手になじむかたちになるまで、ひたすら紙やすりで削っていく作業であったが、紙やすりだけでかたちを変えるのはとても時間がかかるにも関わらず、途中で飽きて放り出してしまう受講生は1人もいなかった。電動の工具やのこぎりなどで、一瞬で簡単にかたちを変えるのではなく、自分の手のひらのなかで、少しの働きかけと少しの変化を感受するやりとりを繰り返しながら、素材と対話し続けるからこそ、それが自然と自分にとって心地よい、大切なかたちになっていく。このプログラムをとおして、あらゆる感覚を総動員して、ものに触れ、物質の広がりを感じた経験が、こどもたちの日常のなかでの世界との接し方に広がりを与えていくことにつながることを期待したい。

【実施分担者】

今井 里沙 美術学部・副手

小林 宏道 美術館・学芸員(課長)

【実施協力者】 ①平成 27 年 8 月 24 日(月):12 名

②平成 28 年 1 月 17 日(日):12 名

【事務担当者】

佐々木 絵美 研究支援部 研究支援課・主事補